

おやつのじかん3 -ちょっとひとやすみ-

一身に付いてきたことからー

NO. 111



子どもの行動を語る時、よく「ルーティンになっていることは、いつもできるんだけど、それが崩れたり、場所が変わったりすると、できなくなったり、動搖したりするので、気を使います…」なんて話がよく出てきます。身に付いてきた力を確認しつつ、臨機応変な対応ができない窮屈さを感じたりするものです。こういうエピソードを、みなさんはポジティブに捉えますか？ それとも「まだまだ」と考えますか？ ちょっと考えてみたいと思います。

着替えや食事、身体を使った遊びやオモチャの操作等、できなかったことが、大人の働きかけに応じながら、少しずつできるようになっていく姿は本当に嬉しいことですし、次への期待も膨らみます。そして、少しずつ自分でできるようになってくると、子ども自身もそれがおもしろくなっています。子どもはすべてが遊び感覚ですからね。

身体を操ることや、人と関わること、場に合わせて過ごすことが得意でない子は、ひとつ覚えたやり方を、次に応用していくのに時間がかかります。同じことを同じ場面で、同じ段取りで取り組むことで楽しみ安心し、満足していきます。その一本道で安心しているのですから、同じようでも少し違うモノや違う場面、違う展開には不安になってしまいます。なので、あまり器用ではない子には、ルーティンになっていることは、できるだけ任せていくことをお勧めします。身支度、食事、遊び等、一日に何回かそんな場面があるようなら、自分らしくでき、マイペースを取り戻せる場面が、その数だけあることになります。新しい出会いや新しい場面が多い時期は、特に大事にしたいポイントです。身に付いてきたことを大いに喜んでいきましょう。次を急がなくても、次は向こうからやってきます。

とはいえる「いやいや、もう少し幅を広げてもらわないと困るなあ」という願いもあると思います。そして、求められる時期もやってきます。そこはどう考えていけばよいでしょう？

まず、“困っている”のは誰ですか？ もし、子ども自身が困っている（次に進みたい）と思っているようなら、気持ちよくチャレンジして、「できた」に届くよう、無理なく進めていきましょう。ポイントは、「もう、そうじゃないよ、こうだよ」ではなく、「これやってみよう、こうするんだよ」と見せて、やって見せるところから始めます。そして100%手伝う支援を繰り返します。子どもが手を伸ばしてたら、すぐに任せず、一緒に息を合わせて最後まで取り組みます。気持ちよく頑張る経験をしてほしいと思います。子ども自身は困っておらず、“焦るのは大人ばかりなり”なようでしたら、取り組むのは今じゃないかもしれません。もう少し現状を熟成させたほうが、おいしく実るかもしれません。進めていきやすいタイミングがあると思います。但し、年令を重ねた放ディの子ども達は、今から無理なくできることを考えていきたいですね。

この夏、我が子の何気ない日常場面を見つめる機会を、是非作ってみてください。いつも同じように取り組めている姿に、きっと頼もしさを感じると思います。そして、少し先を意識し、年令を意識し過ごしていくこともとても大事なことです。展望も見えてきます。でもね、自立を急ぐと、本人の不本意さが、その場面をつまらなくしてしまい、力になりません。

期待したい思いと働きかけの“さじ加減”、あれこれ話しあっていきましょう。(R7. 8) K

